

令和元年度全期教員長期研修
知的障害のある生徒が
創造的に発想し表す力を高める美術科指導

抽象表現に関する 指導ブック



広島県立福山北特別支援学校

教諭 かきのき
柿木 はるか

目次

本書について	1
抽象表現とは	2
知的障害の特性と指導・支援	2
抽象表現に関する学習プログラム	3
第1章 平面の抽象表現編	
①ためして、さわって、どんな感じ？<表現>	7
②あの形、この工夫、どんな感じ？<鑑賞>	9
③表したいことを形で表そう！<表現>	11
第2章 立体の抽象表現編	
④ためして、さわって、どんな感じ？<表現>	15
⑤あの形、この工夫、どんな感じ？<鑑賞>	17
⑥表したいことを形で表そう！<表現>	19
引用文献・参考文献	21
御自由にお使いください	22

本書について

この指導ブックは、広島県立教育センター令和元年度教員長期研修において「知的障害のある生徒が創造的に発想し表す力を高める美術科指導の工夫－抽象表現に関する指導ブックの作成及び活用を通して－」の成果物として作成したものです。

今日の特別支援学校美術科に求められていることは、表現及び鑑賞の活動を通して、自分の表したいこと（主題）を明確にもたせ、実現に向けて思考・判断して追求し、「創造的に表すことができる力」を育成することです。

知的障害特別支援学校では、しばしば「そっくりに描けないから、美術は苦手。」と苦手意識をもち、表現することに消極的になっている生徒がいます。

また、特別支援学校においては、多くの指導者が美術科を指導することもあり、指導や評価が難しいといった悩みを抱えていることと思います。

研究を進めていく中で「抽象表現」が知的障害のある生徒にとって有効な表現方法であるということが分かりました。

そこで、本研究では、「抽象表現」の表現及び活動を通して、「美術ってこんなに簡単で、おもしろい！私にもできる！」と生徒に思ってもらえる学習になるために、指導者のための『抽象表現に関する指導ブック』を作成しました。

指導ブックの指導法やループリックによる評価は、誰が見ても分かりやすいよう工夫しました。また、平面及び立体の制作は、それぞれ第三次で完結する題材構成とし、いつでも誰でも授業に取り入れやすくしました。

毎時ごとの授業内容、指導方法及び評価方法について詳しく記載しておりますので、知的障害のある生徒の実態に応じて、活用してください。

また、巻末の「御自由にお使いください」の素材は、稿者が作成したものです。図画工作科及び美術科以外の授業においても、活用できるものがございましたら、御自由にお使いください。

令和2年3月

令和元年度 広島県立教育センター教員長期研修（全期）
広島県立福山北特別支援学校 教諭 栄木 はるか



抽象表現とは

絵画の表現方法を大別すると、具体的なものを描く具象表現と、具体的なものを描かない抽象表現とに分けられます。

ベティ・エドワーズ（2014）は、「純粹な抽象画で、線の表現力だけを用い、名称のあるものは何も描かない。」というアナログ画による抽象表現を提唱しています。

また、河合規仁（2012）は「アナログ表現は、刻々と変化する表現を即応的に感じ、次の行為を決定し、表現がなされるといった活動であり、絵を描くことに苦手意識を持つ体験者に対して克服を促す効果がみられた。」と述べています。

のことから抽象表現は、具体的な再現描写でなく既存のものに捉われずに発想を広げ、自分にとっての新しい価値を生み出すという創造的な表現活動そのものであり、また、絵を描くことに苦手意識のある生徒にとって、創造的に発想し表すことのできる有効な表現活動であると考えます。



具象表現の例
「読書」
黒田清輝 (1866-1924)



抽象表現の例
「コンポジションVIII」
ワシリー・カンディンスキー
(1866-1944)

知的障害の特性に応じた指導・支援

知的障害について、特別支援学校学習指導要領各教科等編（小学部・中学部）（平成30年）では「知的機能の発達に明らかな遅れと、適応行動の困難性を伴う状態が、発達期に起こるものを言う。」と示されています。

また、知的障害のある生徒の学習上の特性として、「①認知の偏りやイメージ（概念）を形成することの難しさ、②主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないこと」が挙げられます。

これらの特性に対して、本研究では、次のような指導・支援を行っています。

認知の偏りやイメージ（概念）を形成することの難しさ



主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないこと



<指導・支援方法>

- 生徒が興味・関心のあるものを題材として選ぶ。
- 写真やイラストを提示するなどして、視覚的に支援する。
- 注目させる部分を強調させたり、色の効果を使ったりして視覚的に支援する。

<指導・支援方法>

- 目標が達成しやすいような簡単な活動から段階的に活動を設定することで、自信を付けさせる。

③主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ④イメージ（概念）を形成することを促す。

次	授業名	主な学習内容の流れ	知的障害の特性に応じた指導・支援
一	ためして、さわって、どんな感じ？ (表現)	1, いろいろな描画材や材料に触れ、慣れ親む。 2, いろいろな描画材や素材から感じたことを言葉等で表す。 3, 感じたことや考えたことを基に、表したいこと（主題）を決めて、点（かたまり）や線（ひも）を合わせて描いたり・つくったりする。	③ 点（かたまり）、線（ひも）、点（かたまり）と線（ひも）を組み合わせて描く・つくるなどの容易な活動から段階的に活動を設定することで、成功体験を積ませ自信をもたせる。 ④ 素材の特徴に気付かせたり、素材に触ることを通して感じたことや考えたことを表出させる支援として、心情等の簡単な言葉と、それに対応するイラストによる、「どんな感じ？」の言葉表を用意する。
二	あの形、この工夫、どんな感じ？ (鑑賞)	1, 代表者が制作する様子を鑑賞する。 ①表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を見付ける。 ②表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を基に、作者が表したいこと（主題）は何かを考える。 2, 第一次で作成した作品を使い「作品を当てろゲーム」をする。 ①代表者が一つの作品について表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）についてのヒントを3つ言う。 ②表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を基に、作者が表したいこと（主題）を一つ考えて伝える。 ③他の生徒は、ヒントを基にどの作品かを当てる。	① 表現の特徴や工夫（形、動きや強弱、感じる音など）に気付かせる手立てとして、表し方の工夫を具体的に示した図やイラスト、具体物等を用意して、視覚的な支援を行う。 ④ 注目させたい箇所を焦点化したり、必要な情報と背景を切り離したりするなど、図と地を分けて提示したりして、作品を見る視点を示す。 ④ 「どんな感じ？」の言葉表を使って表現させる。 ③ 「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。 ④ 意見を箇条書きでまとめ、色分けし矢印等で結ぶことで、考えを見える化する。
三	表したいことを形で表そう！ (表現)	1, 表したいこと（主題）を表すための効果的な表現の工夫（形、動き、強弱など）の既習内容を確認する。 2, 表したいこと（主題）を決める。 3, 制作する。 4, 制作した作品を鑑賞する。	③ 既習内容を視覚的に提示することで、見通しをもって制作できるようにする。 ④ 主題を見付けさせる手立てとして、感じ取ったことや考えたことを言葉等にして表す場を設定する。 ④ 表現の意図に応じた材料・用具を選択させたり、創意工夫する態度を養うため様々な材料・用具を用意しておく。 ④ 感じ取ったことや考えたことを生徒同士で共有させ、考えを深めさせるため、発言等を板書し全体で共有させる。

次	評価規準	ルーブリック（評価基準）
	素材に触れたり、(描画材を) 試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等の具体的な言葉で表している。 【知識及び技能】	A 素材に触れたり、(描画材を) 試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等の具体的な言葉で表し、表現からそのことを読み取ることができる。 B 素材に触れたり、(描画材を) 試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等の具体的な言葉で表すことができる。 C 素材に触れたり、(描画材を) 試したりすることができる。
	言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて絵や立体で表している。 【思考力・判断力・表現力等】	A 言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて絵や立体で表し、表現からそのことを読み取ることができる。 B 言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて絵や立体で表すことができる。 C 絵や立体で表すことができる。
二	表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えている。 【思考力・判断力・表現力等】	A 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えるとともに、他者の表現から、「自分ならこうする。」といった新しい視点をもち、自身の制作に結び付けることができる。 B 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えることができる。 C 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）を見付けることができる。
三	表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表している。 【思考力・判断力・表現力等】	A 表したいこと（主題）を効果的に表すため、表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表していて、作品からそのことを読み取ることができる。 B 表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表すことができる。 C 表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）を考えて表すことができる。

第1章

平面の抽象表現編

1

ためして、さわって、どんな感じ？

表現

目標

- 素材に触れたり、描画材を試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等を表す具体的な言葉で表すことができる。【知識及び技能】
- 言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて、絵や立体で表すことができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

第一次は、ワシリー・カンディンスキー（1866）が提唱した、点、線及び面による抽象表現を行います。

この時間は、いろいろな描画材を使用し、描画材に慣れ親しむことから段階的にはじめ、生徒から試してみたい、表してみたい思いを指導者が引き出します。

いろいろな描画材を使用して、生徒自身が感じたことや考えたことについて、「どんな感じ」がしたかや、「どんな感じ」を表したいかを聞き取りを行います。生徒が感じたことや考えたことについて、指導者が言語化することが大切で、そうすることで自分で主題を見付け、表現活動を行う美術科の目標へつながっていきます。

また、自分で表したいものを見付けることができれば、「いいな」と思えるものを求め、様々な表し方の工夫を求め、主体的に表現活動に取り組むことができます。

2

用意する材料・用具・支援機器等

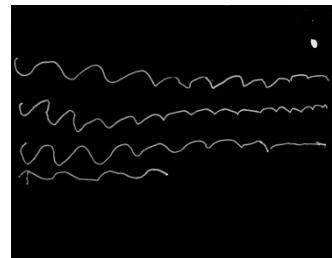
墨汁、サインペン、マジック、クレヨン、コンテ、色鉛筆等



黒地に白か、白地に黒の描画材で描くことがおすすめです。はじめは、色に惑わされることなく、純粹に点と線の表現を楽しめるようにします。



▲生徒作品 点の表現



▲生徒作品 線の表現



▲生徒作品「こわい、ドキドキ」



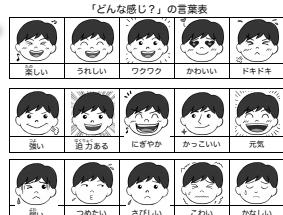
3

指導展開例

①主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ②概念（イメージ）を形成することを促す。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
1	<p>描画材の取扱いについて知る。 いろいろな描画材に触れ、慣れ親しむ。</p> <p>①生徒の実態や興味・関心のある描画材（クレヨン、コンテ、水彩絵の具等）を提示することで制作への意欲を高める。</p>
2	<p>いろいろな描画材を試し、感じたことや考えたことを言葉等で表す。</p> <p>①素材の特徴に気付かせたり、素材に触れることを通して感じたことや考えたことを表出させる支援として、心情等の簡単な言葉と、それに対応するイラストによる「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p> <p>(1) 描画材を試す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 点を描く。 線を描く。 <p>②画用紙の大きさをハガキ大などの大きさにすることででき上がった枚数を増やし、表現することに自信を付けさせる。</p> <p>(2) 描画材を試して、感じたことや考えたことを言葉等で表す。</p> <p>①表現の特徴に気付かせたり、主題を生み出させる手立てとして、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p>
3	<p>感じたことや考えたことを基に、表したいこと（主題）を決めて、点や線を合わせて描く。</p> <p>①表現の特徴に気付かせるため、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p> <p>②生徒の実態や興味・関心のある描画材（クレヨン、コンテ、水彩絵の具等）を提示することで制作への意欲を高める。</p>

○水彩絵の具の濃淡と水の量
○鉛筆の芯を立てる・寝かせる等



評価規準①のタイミング！



評価規準②のタイミング！

4

評価の例（評価基準②の例）



「にぎやか」な感じを表すため、点と線をたくさん描いたり、重ねたりしました。

ルーブリック（評価基準）

A	言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて絵や立体で表し、表現からそのことを読み取ることができる。
B	言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて絵や立体で表すことができる。
C	絵や立体で表すことができる。

2

あの形、この工夫、どんな感じ？

鑑賞

目標

- 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えることができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

抽象表現に関する学習プログラムの第二次では、鑑賞の活動を行います。この鑑賞の活動が、第一次の表現活動と、第三・四次の表現活動をつなぐ大切な活動になります。

また、鑑賞の活動においては、次の二つの指導の視点を取り入れて指導を行うと効果的です。

- ①「表現の特徴や工夫」と「表したいこと（主題）」を関連付けて考えさせる。
 - ②生徒の発想を広げさせるため、指導者はファシリテーターとしての役割を意識する。

①「表現の特徴や工夫」と「表したいこと（主題）」を関連付けて考えさせる。

第二次では、他者の作品を「表現の特徴や工夫」と「表したいこと（主題）」の視点で鑑賞させます。

鑑賞の視点を養わせるため、ゲーム形式で次の二つの活動を設定します。

- ◆鑑賞の活動①「制作する様子を見て、表したいこと（主題）は何かを考えるゲーム」
 - ◆鑑賞の活動②「第一次で制作された作品を使い、作者が表したいこと（主題）を当てるゲーム」
- 詳しい活動内容は、3指導展開例に示しています。

②生徒の発想を広げさせるため、指導者はファシリテーターとしての役割を意識する。

ファシリテーションを行う際は、発問、生徒の考え及び話し合いの内容を色分けしたり、図形や矢印等を用いたりして「見える化」します。

話し合いの内容等が視覚化されることは、イメージ（概念）を形成することに難しさのある知的障害のある生徒にとっての有効な支援となります。

知的障害の特性に応じたファシリテーションの例

特性	知的障害の特性に応じた指導・支援
主体的に活動に取り組む意欲	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「なるほど。」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を受容する。 ○ イラストや選択肢を用意することで、意見表出が苦手な生徒の表出を促す。
イメージ（概念）を形成すること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 焦点化し考えを深めたい発言は、「△△は■■に見えるのですね。」などと意図的に繰り返す。 ○ 意見を箇条書きでまとめ、色分けし矢印等で結ぶことで、考えを見える化する。

2

用意する材料・用具・支援機器等

第一次の生徒作品、第一次で使用した描画材、

どんな感じ？の言葉表、「表現の特徴や工夫&表したいこと（主題）」カード



3

指導展開例

③主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ①概念（イメージ）を形成することを促す。 ②ファシリテーションを行う。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
<p>【鑑賞の活動①】代表者が制作する様子を鑑賞する。</p> <p>(1)表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を見付ける。 ①表現の特徴や工夫（形、動きや強弱、感じる音など）に気付かせる手立てとして、表し方の工夫を具体的に示した図、イラスト及び具体物等を用意して、視覚的な支援を行う。</p> <p>(2)表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を基に、制作者の「表したいこと（主題）」を考える。 ①「どんな感じ？」の言葉表を使って表現させる。 ②「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。 ③意見を箇条書きでまとめ、色分けし矢印等で結ぶことで、考えを「見える化」する。</p>	<p>表現の工夫の例（音）</p>  <p>トントン トントン...</p> <p>ファシリテーションによる対話の例</p> <p>生徒A 「シャッシャツ…」 生徒B 「かなり強く描いているね。」 指導者 「なるほど。かなり強くシャッシャツと描いているのですね。では、どういう感じがする？」 生徒B 「強くシャッシャツと描く…あ、迫力ある感じじゃないかな。」</p>
<p>【鑑賞の活動②】第一次の生徒作品を使い「作品を当てろゲーム」をする。</p> <p>(1)代表者のみが対象の作品を鑑賞する。 ①スリット等を使い、注目させたい箇所を焦点化したり、必要な情報と背景を切り離すなど図と地を分けて提示したりして、作品を見る視点を示す。</p> <p>(2)代表者が一つの作品について、表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じた音など）についてのヒントを三つ言う。 ②意見を箇条書きでまとめることで、「見える化」する。 ③「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。</p> <p>(3)代表者が、表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じた音など）を基に、作者が表したいこと（主題）を考えて伝える。</p> <p>(4)他の生徒は、どの作品かを当てる。</p>	<p>表現の特徴や工夫</p>  <p>大きく作る つかむ, たたく 迫力ある</p> <p>表したいこと（主題）</p>

4

評価の例

ルーブリック（評価基準）	
A	表し方の工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えるとともに、他者の表現から、「自分ならこうする。」といった新しい視点をもち、自身の制作に結び付けることができる。
B	表し方の工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えることができる。
C	表し方の工夫（形、動き、強弱など）を見付けることができる。



3

表したいことを形で表そう！

表現

目標

- 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表すことができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

第三次では、色や面の要素も取り入れます。色画用紙等を様々な形に切った色面を用意しておき、表したいこと（主題）に応じて、生徒に取捨選択させ、画面を構成させます。

また、「表現の工夫」を広げるために、授業の導入で、色のもつイメージや、組み合わせることで得られる効果等について学習することも効果的です。

また、制作後は既習の鑑賞の活動の視点を基に、活動を取り入れます。

第二次で行った鑑賞活動のようなクイズ形式でも良いですし、生徒自身に、自分の作品についての説明を行わせることも良いです。

その際には、第二次のような方法で、「表したいこと（主題）」と「表現の特徴や工夫」を関連付けて説明させるようにします。



▲生徒作品「ドキドキ」



▲生徒作品「強い」

2

用意する材料・用具・支援機器等

墨汁、サインペン、マジック、クレヨン、コンテ、色鉛筆、色面（三角、四角、丸、線などの任意の形に色が付いたもの）、どんな感じの言葉表

 生徒の実態に応じて、これ以外にも様々な描画材を用意して、描きたいものに応じて生徒に描画材を選択させましょう。



▲色画用紙等を任意の形に切った色面
寒色、暖色など、様々な色を用意しましょう。

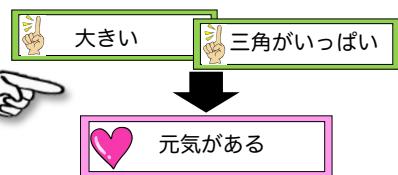
3

指導展開例

①主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ②概念（イメージ）を形成することを促す。 ③ファシリテーションを行う。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
1	<p>(1) 「表したいこと（主題）」を表すための効果的な「表現の特徴や工夫」（形、動き、強弱など）の既習内容を確認する。</p> <p>①前時の内容を視覚的に提示することで、視点をもって制作できるようにする。</p> <p>(2) 色のもつイメージについて身近にある配色について言語化させる。</p> <p>①言葉表を使用するなどして、色や配色に対するイメージを言語化させる。</p>
2	<p>(1) 表したいこと（主題）を決める。</p> <p>①主題を見付けさせる手立てとして、感じ取ったことや考えたことを言葉等にして表す場を設定する。</p> <p>①主題を生み出させる手立てとして、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p> <p>①創意工夫する態度を養うため、表現の意図に応じた様々な材料・用具を用意して、表現の意図に応じた材料・用具を選択させる。</p> <p>(2) 点、線色を組み合わせて制作する。</p> <p>②生徒の実態や興味・関心のある描画材を提示することで制作への意欲を高める。</p>
3	<p>(1) 制作した作品を鑑賞する。</p> <p>(2) 作品について説明する。</p> <p>①感じ取ったことや考えたことを生徒同士で共有させ、考えを深めさせるため、発言等を板書し全体で共有する。</p> <p>①②意見を箇条書きでまとめることで、「見える化」する。</p> <p>③「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。</p>

既習内容の確認の例



色のもつイメージの学習例

様々な色の色紙を用意し、2色を組み合わせることで得られるイメージについて考えさせる。
など



▲生徒作品「はげしい」

4

評価の例



「かなしい」がテーマです。
そのために、暗い色と細い四角形を
たくさん重ねました。

ルーブリック（評価基準）

A	表したいこと（主題）を効果的に表すため、表し方の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表していく、作品からそのことを読み取ることができる。
B	表し方の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表すことができる。
C	表し方の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）を考えて表すことができる。

第2章

立体の抽象表現編

4

ためして、さわって、どんな感じ？

目標

- 素材に触れたり、描画材を試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等を表す具体的な言葉で表すことができる。【知識及び技能】
- 言葉からイメージを広げ、それを表すための工夫（形、動き、強弱など）を考えて、絵や立体で表すことができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

第一次は、土粘土に触れ、材質感に慣れ親しむことから段階的に始めます。

知的障害のある生徒の場合、初めて触るものに不安を覚えることもあるため、徐々に土粘土に触れさせたり、使用する土粘土の量を調整したり生徒の実態に応じて配慮します。

平面の抽象表現同様、立体でも、「点→かたまり」「線→ひも」を作ることで、表現を行います。

かたまりやひもの表現は、小学部・中学部段階で経験していることも多いため、生徒は自信をもって制作を進めることができます。

また、土粘土に触りながら、感じたことや考えたことを表出することができるよう、既習の鑑賞の視点で、指導者は聞き取り等で生徒の「表したいこと（主題）」を引き出します。



▲生徒作品 かたまりの表現



▲生徒作品 ひもの表現

2

用意する材料・用具・支援機器等

土粘土（一人 500g～1kg程度）、粘土板、粘土ヘラ、伸ばし棒、スプーン、フォーク、竹串等

触ることに抵抗のある生徒には、実態に応じて、土粘土の量や硬さを調整しましょう。



◀生徒作品 土粘土を力強く指で押された表現



▲生徒作品 かたまりとひもを組み合わせた表現
「ワクワク楽しい」

3

指導展開例

③主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ①概念（イメージ）を形成することを促す。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
1	<p>土粘土や道具の取り扱いについて知る。 土粘土に触れ、慣れ親しむ。 ①イラストや図を用いて説明することで視覚的な支援を行い、理解を促す。</p>
2	<p>土粘土に触れ、感じたことや考えたことを言葉等で表す。</p> <p>(1) 土粘土に触れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かたまりをつくる。 ・ひもをつくる。 <p>③生徒の実態や興味・関心のある描画材を提示することで制作への意欲を高める。</p> <p>(2) 土粘土に触れて、感じたことや考えたことを言葉等で表す。 ①素材の特徴に気付かせたり、素材に触れてみて感じたことや考えたことを言葉等で表すための支援として、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p>
3	<p>感じたことや考えたことを基に、表したいこと（主題）を決めて、かたまりやひもを合わせてつくる。 ①表現の特徴に気付かせたり、主題を生み出させる手立てとして、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p>



○へら、フォーク、伸ばし棒等の使い方や安全指導など。

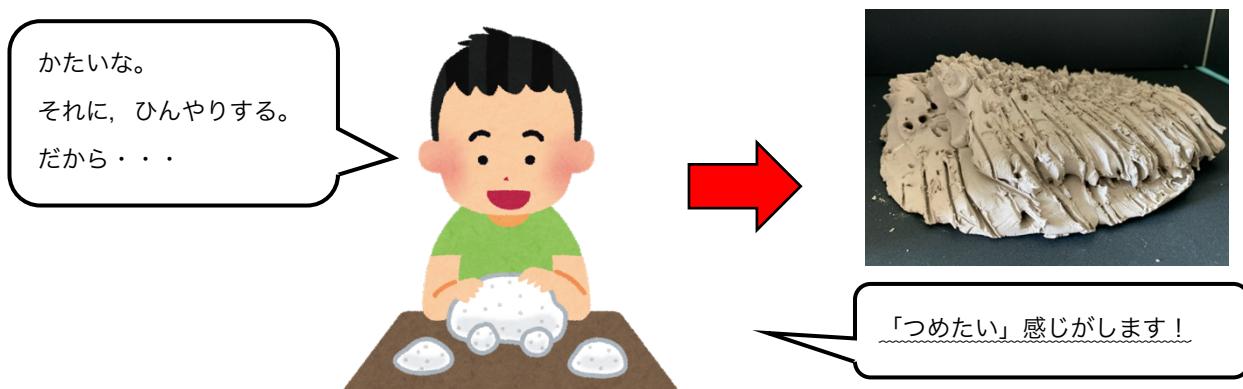


評価規準①のタイミング！

評価規準②のタイミング！

4

評価規準①の例



ルーブリック（評価基準）

A	素材に触れたり、試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等の具体的な言葉で表し、表現からそのことを読み取ることができる。
B	素材に触れたり、試したりすることを通して、感じたことや考えたことについて、「楽しい」「迫力ある」などの心情等の具体的な言葉で表すことができる。
C	素材に触れたり、試したりすることができる。



立体

あの形、この工夫、どんな感じ？

鑑賞

目標

- 表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えることができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

「表現の特徴や工夫」を基に、「作者が表したいこと（主題）」を結び付けて考えさせます。

このような造形的な視点をもたせ、創造的な表現にもつなげます。

土粘土による立体の抽象表現においても、第二次では、ゲームを使った鑑賞活動を行います。

平面の抽象表現同様、指導者はファシリテーターとして「表現の特徴や工夫」と「作者が表したいこと（主題）」を関連付けて考えることができるようなファシリテーションを行います。

また、立体の抽象表現では、制作中の音に注目させることも効果的です。

粘土を叩きつけたときに出る「バンッ」という音、手のひらで成形するときに聞こえる「パンパン」や「パシパシ」などなど。

生徒に「どんなときに、この音が出た？」と問うと、「手のひらで、粘土を強く叩いたときに出る音だ！」などと、表現の工夫を考えさせることができます。



2

用意する材料・用具・支援機器等

第一次の生徒作品、第一次で使用した描画材、
どんな感じ？の言葉表、「表現の工夫&どんな感じ？」カード

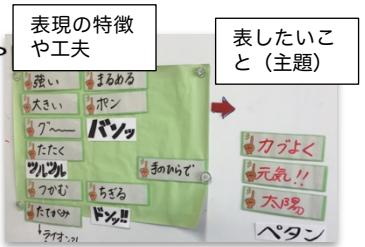
 立体作品の鑑賞の際は、360度様々な角度から作品を鑑賞することができるよう、ろくろに作品を置いて鑑賞させることがおすすめです。



3

指導展開例

①主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ②概念（イメージ）を形成することを促す。 ③ファシリテーションを行う。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
<p>【鑑賞の活動①】代表者が制作する様子を鑑賞する。</p> <p>(1)表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を見付ける。 ①表現の特徴や工夫（形、動きや強弱、感じる音など）に気付かせる手立てとして、表し方の工夫を具体的に示した図やイラスト、具体物等を用意して、視覚的な支援を行う。</p> <p>①作品の後ろに黒い画用紙を置くなど、注目させたい箇所を焦点化したり、必要な情報と背景を切り離すなど図と地を分けて提示したりして、作品を見る視点を示す。</p> <p>(2)表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じる音など）を基に、作者が「表したいこと（主題）」を考える。 ①「どんな感じ？」の言葉表を使って表現させる。 ②「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。 ③意見を箇条書きでまとめ、色分けし矢印等で結ぶことで、考えを「見える化」する。</p>	 <p>表現の特徴や工夫（形、動きや強弱、感じる音など）に気付かせる手立て（例）</p> 
<p>【鑑賞の活動②】第一次の生徒作品を使い「作品を当てろゲーム」を行う。</p> <p>(1)代表者が、対象の作品を鑑賞する。他の生徒は顔を伏せる。 ①注目させたい箇所を焦点化したり、必要な情報と背景を切り離すなど図と地を分けて提示したりして、作品を見る視点を示す。</p> <p>(2)代表者が、一つの作品について、表現の特徴や工夫（形、動き、強弱、感じた音など）についてのヒントを三つ言う。 ②意見を箇条書きでまとめることで、「見える化」する。 ③「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。</p> <p>(3)代表者が、表し方の工夫（形、動き、強弱、感じた音など）を基に、作者が「表したいこと（主題）」を考えて伝える。</p> <p>(4)他の生徒は、どの作品かを当てる。</p>	

4

評価の例



竹串でたくさん傷付けてあるので、強い感じがします。

ルーブリック（評価基準）

A	表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えるとともに、他者の表現から、「自分ならこうする。」といった新しい視点をもち、自身の制作に結び付けることができる。
B	表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）と、作者が表したいこと（主題）を関連付けて考えることができる。
C	表現の特徴や工夫（形、動き、強弱など）を見付けることができる。

6

表したいことを形で表そう！

表現

立体

目標

- 表現の工夫（形、動き、強弱、バランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表すことができる。【思考力・判断力・表現力等】

1

題材の内容と指導のポイント

いよいよ最後の活動です。

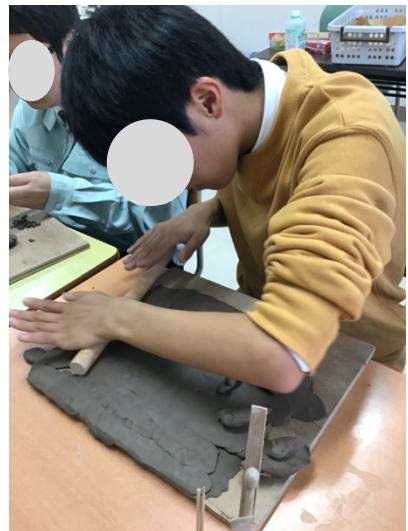
これまでに作ってきた、かたまりやひもの表現を使い、生徒だけの抽象表現を行わせます。

土粘土を使った作品のおもしろさは、平面ではなく、立体であることにあります。

知的障害のある生徒の実態に応じて、奥行き・幅・高さの概念を指導することも、立体制作の指導においては有効です。

例えば、「手で包める感じに作ろう。」や「かたまりやひもを重ねて高く（奥ゆきがあるように）作ろう。」などと言葉を掛けると良いです。

制作途中で、生徒同士の作品を鑑賞し合わせて、互いの作品の良さやおもしろさを認め合わせると、表現に幅が生まれてより創造的な制作ができます。



2

用意する材料・用具・支援機器等

土粘土（一人 500g～1kg程度）、粘土板、粘土ヘラ、伸ばし棒、スプーン、フォーク、竹串等



この他にも、知的障害のある生徒が興味・関心をもてそうな道具（日用品など）を用意して、試行錯誤して表そうとする態度を養いましょう。



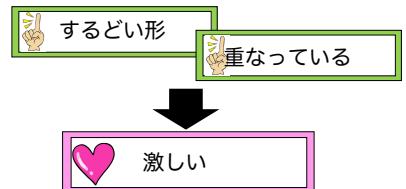
3

指導展開例

①主体的に活動に取り組む意欲を高める。 ⑦概念（イメージ）を形成することを促す。 ⑦ファシリテーションを行う。

主な学習の流れと知的障害の特性に応じた指導・支援	
1	<p>表したいこと（主題）を表すための効果的な表現の工夫（形、動き、強弱など）の既習内容を確認する。</p> <p>③既習内容を視覚的に提示することで、見通しをもって制作できるようにする。</p>
2	<p>(1) 表したいこと（主題）を決める。</p> <p>①主題を見付けさせる手立てとして、感じ取ったことや考えたことを言葉等にして表す場を設定する。</p> <p>①表現の特徴に気付かせたり、主題を生み出させる手立てとして、簡単な言葉と対応する表情等のイラストを載せた「どんな感じ？」の言葉表を用意する。</p> <p>②表現の意図に応じた材料・用具を選択させたり、創意工夫する態度を養うため、様々な材料・用具を用意しておく。</p> <p>(2) 制作をする。</p> <p>③生徒の実態や興味・関心のある描画材を提示することで制作への意欲を高める。</p> <p>④表現の意図に応じた材料・用具を選択させたり、創意工夫する態度を養うため、様々な材料・用具を用意しておく。</p>
3	<p>(1) 制作した作品を鑑賞する。</p> <p>(2) 作品について説明する。</p> <p>⑤感じ取ったことや考えたことを生徒同士で共有させ、考えを深めさせるため、発言等を板書し全体で共有する。</p> <p>⑥意見を箇条書きでまとめて、「見える化」する。</p> <p>⑦「なるほど」などの肯定的な相槌を打ち、生徒の意見を認める。</p>

既習内容の確認の例



4

評価の例



表したいことは、「かわいい」感じです。
粘土を丸めて重ねたり、ひもをやわらかく作ったりして、やさしく置きました。

ルーブリック（評価基準）

A	表したいこと（主題）を効果的に表すため、表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表していく、作品からそのことを読み取ることができる。
B	表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）と、表したいこと（主題）を関連付けながら工夫して表すことができる。
C	表現の工夫（形、動き、強弱、余白やバランス、色や質感、材料・用具など）を考えて表すことができる。

引用文献・参考文献

- ベティ・エドワーズ著・高橋早苗訳（2014）：『内なる創造性を引き出せ』河出書房新社
- 河合規仁（2012）：「臨床美術アートプログラムにおける「アナログ表現」の研究－「アナログ表現」における抽象的表現の効用－」『東北文教大学紀要第2集』
- 文部科学省（平成30年）：『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）』開隆堂出版 p. 20
- 河村陽子（平成27年）：「主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成する『絵に表す活動』の指導の工夫-思いと表現の工夫をつなげるための『表現ブック』の活用を通して-」『広島県立教育センター平成27年度 全・前期教員長期研修研修報告書』pp. 17-24 に詳しい。

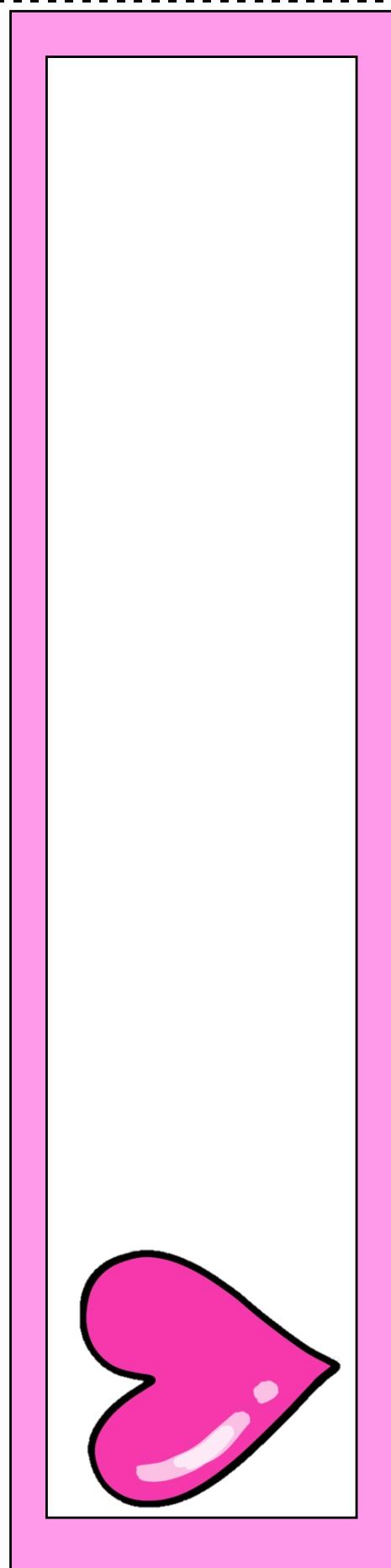
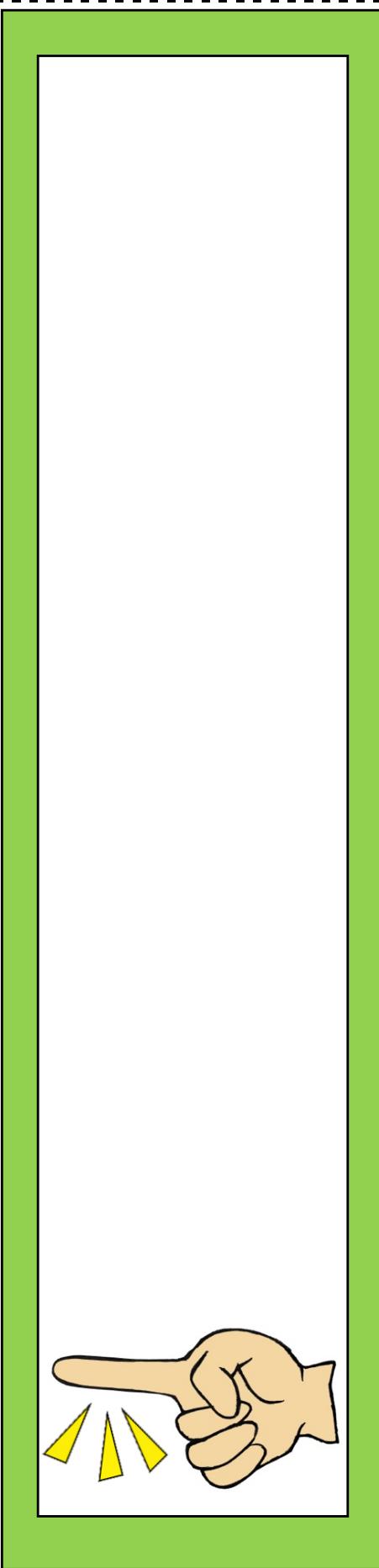


「どんな感じ？」の言葉表

	たの 楽しい	うれしい
	ワクワク	かわいい
	ドキドキ	
	迫力ある	げんき 元気
	強い	かっこいい
	弱い	さびしい
	つめたい	こわい
	かなしい	

表現の特徴や工夫

表したいこと（主題）



音の効果音カード

ズバッ	キュウ
ポン!!	コロコロ
シャー	ツルツル
ドンッ!!	トントン トントン...
ドローッ	バンッ
ピーン	ペタン